〔書　評〕

姫野昌子著

『複合動詞の構造と意味用法』

斎　藤　倫　明

1. はじめに

1970年代の後半から80年代の初めにかけて，本書の著者である姫野昌子氏(以下，「著者」と呼ぶ)が東京外国語大学『日本語学校論集』に次々と発表した一連の複合動詞論を，当時まだ大学院生であった筆者(本稿の筆者，斎藤を指す。以下同じ)はわくわくしながら読んだことを鮮明に記憶している。本書の中核部分をなす具体的な複合動詞の分析の基になった論考である。その後，筆者はそれらの複合動詞論が単行本としてまとめられることを心から待ち望んでいたのだが，著者の興味が他のところに移ったのか，そのままになってしまったのは筆者にとって非常に残念であった。それが，初出以来20年を経，その後の複合動詞論の進展を踏まえて加筆増補された上に，複合動詞論と複合動詞から見た動詞分類論をも加えこの度単行本化された。いわば筆者の長年の願いがようやく叶ったわけであり，そういう意味では，本書の刊行は筆者にとって大変感慨深いものがある。

筆者は必ずしも与しないが，言語研究，特に現代語研究には一般に理論的研究と記述的研究とがある，とよく言われる。本書は複合動詞をテーマとするものであるが，そういった二分法に則って見るならば，本書は基本的に語構成の記述的研究に属すると言えよう。というのは，後述するように，本書でも理論的な問題が扱われてはいるが，本書のいわば真骨頂はまちがいなく記述的研究面にあり，本書を読むと語構成論における記述的研究とはどういうものか，ということがよく分かるからである。そして，このことは具体的には次のことを意味する。すなわち，本書においては，複合動詞というものが前項と後項という二つの構成要素から成り立ちながらも全体としては一語であるということを根本に据えた上で，それら構成要素が単独の動詞として使われる場合と構成要素として一語の中に存在する場合との関係がどうなっているのか，また類義語との差異がそういった構成要素の性格からどのように生み出されるのか，といった問題が扱われているが，そういった問題は語構成論である以上どのような理論的枠組みで考えるにせよ避けては通れない基本的なものに他ならない，ということである。

最近の語構成論を見ると，理論的研究が比較的多く，しかも統語論との関わりで語構成を考える論が多いように見受けられる。もちろん，そのことは大変重要なことであり，

ないがしろにできない視点であるが，語構成論というのは，一方で語彙論の一分野でもある。そして，そのことは，遡れば，語という単位そのものに統語と語彙との両面の性格が付与されているということに起因する。従って，最近の語構成論が統語論との親近性を強く有するというのは，語の統語的な側面を重視するということに他ならず，そのことは，そういった論の多くが「語形成」という用語を好むということに繋がっていく。つまり，語の生成的な側面，換言すれば語と文との平行性に焦点を当てて分析しようという立場に立つ傾向が強いということである。しかしながら，語には文とは決定的に異なる側面，すなわち，個別的で予測不能な側面が色濃く存在しているということを忘れるわけにはいかない。そしてそれは畢竟，語の一語としての統一性から来るものであると考えられるが，そのことを強く意識させてくれるのが内部に構造を有する合成語を対象とする語構成論の記述的研究であると筆者は思うのである。そういう点からすると，本書は紛れもなく語構成論における記述的研究の最良の見本の一つであり，筆者としては，これから語構成論をやろうとする若い人たちにぜひ一読することを勧めたい。

2. 本書の構成と内容のあらまし

本書の構成は以下の通りである（全12章構成）。

第1章　複合動詞とは
第2章　複合動詞の結合パターン
第3章　「〜あがる」,「〜あげる」および下降を表す複合動詞類
第4章　「〜こむ」および内部移動を表す複合動詞類
第5章　「〜でる」と「〜だす」
第6章　「〜つく」と「〜つける」
第7章　「〜かかる」と「〜かける」
第8章　「〜あう」と「〜あわせる」
第9章　「〜きる」,「〜ぬく」,「〜とおす」
第10章　「〜なおる」と「〜なおす」
第11章　「〜たつ」,「〜たてる」と「〜まくる」
第12章　複合動詞の結合性から見た動詞の意味分類と分析の可能性
付．　複合動詞リスト

全体は，大きく3部に分かれると見てよい。すなわち，第1，2章が全体の序論で複合動詞概論，第3〜11章が本論で具体的な複合動詞の分析，第12章が発展で動詞の結合性から見た動詞分類論，の3部構成であるが，このうち，本書の中心は何と言っても第2部に相当する具体的な複合動詞の分析部分であろう。質的にはもちろん，量的に言っても全体の3分の2を占める。そこで，本節では，第1部に相当する第1,2章と第3部に相当する第12章部分の内容を簡単に紹介し問題点を指摘するにとどめ，本論部分の第

3〜11章については，別に次節「本書の特徴」において詳しく見ることにしたい。

第1章は，複合動詞とは何か，ということについて論じた章であるが，その中心的な論点は，複合動詞後項と補助動詞（「してあげる」「恥じている」etc.の下線部分等，「て」に続く動詞部分）との違いについてである。提示されている結論は，一般的に言えば，後者の方が前項との結合がゆるく自由度が高いのでありその点が様々な形となって表われてくる，というものであるが，この点は先学によって既に指摘されていることであり特に目新しいものではない。むしろ，本書の特徴がよく出ているのは，「降っている」と「降り続く」，「書いてしまう」と「書き終わる」，「降ってくる」と「降り出す」等の具体的な類義形式の相違に関する記述であろう。

第2章では二つの問題が論じられている。一つは複合動詞の分類であり，もう一つは複合動詞後項のうちでも特に生産性の高いグループ（これを本書では「接尾辞的後項動詞」と呼んでいる）の意味機能についてである。後者は，第3章以降の具体的な複合動詞分析の導入部としての役目をも担っている。

複合動詞の分類に関しては，寺村秀夫，山本清隆，影山太郎，の3氏の分類と問題点を紹介したうえで，本書独自の複合動詞分類試案を提出している。その骨子は，まず全体を影山の「語彙的複合動詞」（A類）「統語的複合動詞」（B類）に従って大きく二分し，次にそれぞれのグループを，複合動詞全体の意味が前項，後項でうまく言い換えられるか否かという基準によってさらに四つに下位区分するというものである（ただし，B類は四つのうちの二つを欠く）。次に，「接尾辞的後項動詞」については，同形式に関する上記3氏と城田俊の意味分類を紹介することによって，以下本書で扱う形式の位置づけを明確にしたのち，本書では取り上げられなかった幾つかの形式（アスペクトを表わす「〜始める」「〜続ける」「〜終わる/終える」etc.）について簡単に説明を加えている。

第12章では，二つの問題を論じている。一つは，「接尾辞的後項動詞」との結合性から見た動詞の分類であり，もう一つは，どのような後項動詞と結合するかという点から見た類義動詞の相違についてである。

動詞の分類については，具体的には，方向性（「あがる」「さがる」「こむ」「でる」等），指向性（「かかる」「つく」「こむ」等），接着性・対等接合性（「つく」「あわせる」等），創出・完成（「だす」「あがる」等），単独性・共同性（「あう」），を表わす後項動詞との結合性から動詞を分類したものであり，それぞれの場合に対象となる動詞がどのように分類されるかを示した分類表が掲げられている。次に，類義動詞の意味分析については，「思う」と「考える」，「しみる」と「にじむ」，「したたる」「垂れる」「伝う」「あふれる」「こぼれる」，「抱く」と「抱える」，「つる」と「つるす」，などの類義語を対象として取り上げ，一般にそれぞれのグループにおいて各語がどのような後項動詞と結合するかを一覧することによって，それぞれの類義語間の意味的相違を簡潔に記述している。

上記3章において本書独自の分析結果が提示されているのは，①複合動詞の分類，②

「接尾辞的後項動詞」との結合可能性から見た動詞の分類，③後項動詞との結合可能性から見た類義動詞の意味分析，の3点である。そこで，ここでは，これらの点に限って筆者が気になった問題を簡単に指摘しておきたい。

①については，A類，B類という大分類と，前項・後項で複合動詞の意味が言い換えられるか否かによる下位分類との理論的な関わりが明確でないことが挙げられる。また，B類においては，下位分類があまり機能していない点も気になる。著者は，このような分類を施すことによって「多様な複合動詞の一つひとつがどこかの項目に分類し得るのではないかと思われる。」(22ページ)と述べているが，全ての複合動詞がとにかく分類できればそれでよいというものでもあるまい。この方法で分類することの意義が今一つ不明である。

②については，この方法で本当に動詞の分類ができるのかどうか疑問が残る。たとえば，「燃える」が「燃え上がる」「燃え落ちる」という複合動詞を作ることから「上下方向」という特徴を有するとされているが，「燃える」という動詞そのものにそういった方向性が本来備わっているとは思いにくい。「上がる」や「落ちる」が付きうるということが「燃える」にとってどういうことなのか，という点についてもう少し原理的に考察する必要があるのではないか。

③については，この方法で類義語の意味的差異がどこまで明らかにできるのか検討してみる必要があろう。あくまでも基本は通常の文脈分析に基づいた類義語の意味分析であり，本書の方法はどこまでもそういった方法の補助的手段の一つにすぎないのではないか。たとえば，本書で取り上げられている類義語の幾つか(「したたる」「垂れる」，「つる」「つるす」etc.)を，『ことばの意味　辞書に書いてないこと』(柴田武・國弘哲彌編，全3巻，平凡社，1976〜82年)などの分析と比較してみればその辺のことがよく分かるであろう。

3. 本書の特徴

前述したように，本書の第3章から第11章までの具体的な複合動詞の分析が本書の中心部分となるが，そのうち第10章と第11章は今回新しく書き下ろしたものであり，それ以外の7章は著者がかつて個別に発表した論を修正増補したものである。本節ではこれらの部分を対象として，本書の具体的な分析法の特徴と問題点を探ることとし，そのことを通して本書全体の特質を浮き彫りにしたいと思う。

まず，分析対象として選ばれている後項動詞についてであるが，前掲目次を見れば分かるように，いずれも造語力の豊かな，日本語の複合動詞構成形式としては代表的な形式である。その点をより明確にするには，本書で具体的に扱っている後項動詞32語(特に詳しく扱っているのは22語)のうちの19語が，本書自身の引いている『複合動詞資料集』(野村雅昭，石井正彦，林翠芳編，1987年)に示された，構成する異なり語数の多い後項動詞上位30語に含まれている(25ページ参照)ことを確認するだけで充分であろう。

しかしながら，一方で，本書における各章ごとの具体的な後項動詞の選択の仕方は独特である。具体的に言えば，第5，6，7，8，10章のように，自他の対で対象を選んでいる章を基本とし，それに第3，4，11章のように反義形式（第3章）や類義形式（第4，11章）といった関連形式を組み合わせた章が加わるという形でほぼ全体が統一されているのである。ただ，そう見ると，第9章の分析対象の選択の仕方が他の場合に比べて異質であることが分かる。すなわち，同章は「～きる」「～ぬく」「～とおす」を扱っているのであるが，これらは自他の対の関係にはなく，「『切断』や『貫通』という具体的な動作を表す語の意味が転用され，完遂や完了を意味するようになったものである。」(173ぺ)と言われているように，原義と派生義の両者において類義関係を構成するという観点から選ばれているのである。しかし，自他の対という基準で選ばれている場合にしても，よく見ると必ずしも全ての対が同質とは言えない。特に第8章の場合，自動詞形式に相当する「あう」は他の場合の自動詞形式とは異なり，ほとんど単独用法の意味では複合動詞を構成せず，常に「『対称関係，相互性』を成立させる統語的複合動詞『～あう』」(144ぺ)を構成する接尾辞的な用法しか有していないという点で特異である。

本書の具体的な複合動詞の分析は基本的には同じパターンに従って展開される。すなわち，第3章と第4章の語例によって示すならば次のごとくである。(1)はじめに自動詞形(「～あがる」「～こむ」)を対象として取り上げ，最初に意味用法を分類した一覧表を掲げ，以下それに従って各用法ごとに詳しく説明を加える。(2)次に他動詞形(「～あげる」「～こめる」)を取り上げ，同様に意味用法を分類した一覧表を掲げ，以下各用法ごとに詳しく説明を加える。(3)反義形式(「～おちる」「～おとす」「～おりる」「～おとす」etc.)や類義形式(「～いる」「～いれる」)といった関連形式を同時に取り上げる場合は，それらについても同様に分析する。(4)最後に，自・他動詞形や関連形式間の意味用法の対応・非対応に意を用いてまとめる。

ここで特徴的なのは，各分析の冒頭に掲げられる意味用法を分類した一覧表である。この表は，その後項動詞を有する複合動詞の意味用法を概観するのに大変便利なものであるが，見方を変えれば，著者が複合動詞の意味用法を分類する際に基本的にどのような観点に立って行なっているのかを示すものでもあると言える。いずれの場合も，取り上げられている観点は，(i)文型，(ii)自動詞か他動詞か，(iii)意味特徴，の3点であるが，このうち(iii)が少し分かりにくい。というのは，著者は分類した全ての場合に何らかの意味特徴を与えているが，後項動詞がどういう意味を有しているのか明確には分からない場合もあるように思われるからである。たとえば，「～あがる」については，「上昇」(駆けあがる)，「完了・完成」(できあがる)，「強調」(震えあがる)，「増長」(つけあがる，思いあがる)，「尊敬語」(召しあがる)と分類・記述されているが，「つけあがる」や「思いあがる」の「あがる」に「増長」の意味があるとは考えにくいのではないか（著者自身，これらについて，「一体化していて分析が困難だが，しいて言えば，『あがる』は，程度を超えて

“あがる”厚かましさを表していることになろうか。」(42ページ)と述べている)。他にも,「追いかける」「見かける」の「かける」に対して「把捉」といった意味特徴が与えられているが,同様の疑問を感ずる(いずれの場合にも,語例が2個と少ない点に注意する必要があろう)。

以上の他,第3章から第11章の具体的分析に関して,筆者が特に特徴的であると感じた点を3点ほど簡単に記しておきたい。

第一は,挙げられている用例が豊富かつ適切なことである。本書の説明(37ページ)によれば,この部分の用例の基本的な出典は,「教育出版『小学国語』1〜6年(1973年)」「朝日新聞・読売新聞(1975〜1998年)」「『PHP』(1975〜1998年)」の3種ということであるが,記述的研究の場合,分析の過程においていかに適切な用例を提示するかということが分析の信頼性に影響を与えることを考えると,本書の用例の量と質には感服させられる。これだけ意味用法を細かく分類しているのにも拘わらず,「用例は採集できなかった」と明確に記してあるのは,筆者が見たかぎりでは一カ所(159ページ)だけである。

第二は,本書は基本的には現代日本語の複合動詞を分析したものであるが,歴史的な背景にも目が向けられている点である。たとえば,「こむ」(60ページ)と「だす」(101ページ)を論ずる際に,それらが自動詞,他動詞の区別無く自由に前項動詞と結合し「内部移動」や「開始のアスペクト」を表わす複合動詞を数多く作り出せるのは何故なのか,について歴史的な観点から簡単に考察してみる,といった具合にである。両者は必ずしも成立事情が同じではないし,著者の説明は十分なものではないが,いずれも造語力の強い接辞的な後項動詞の成立と自他との関わりに関する問題であり,筆者には大変興味深かった。

第三は,第3章から第9章までの既発表の論文を基にした章において,原論文発表以後の複合動詞研究の成果が効果的に取り入れられている点である。特に,「〜だす」と「〜始める」の相違点に関する今井忍の批判(100〜101ページ),「〜きる」の「切断・終結」の意味と「完遂」の意味との関連性に関する石井正彦の批判(176〜177ページ),「〜あわせる」の「示し合わせる,誘い合わせる,待ち合わせる」の所属に関する影山太郎の疑問(168〜169ページ)に対してのように,原論文において著者が指摘した点に関するその後の批判や疑問等に関してそれらを一々取り上げ検討しているのには,著者の研究者としての誠実な姿勢がよく表われていると言えよう。

4. おわりに——本書の位置づけ——

1.で述べたように,本書の本質はどこまでも記述的研究面にある。従って,複合動詞に関する理論的問題,たとえば,複合動詞全体の意味が構成要素の意味から生み出されるプロセスを,他の言語現象をも含めたトータルな言語研究の中に位置づけて考えた場合,どのように記述するのが最も妥当か,といったような問題に対する解答を本書に求めるのは筋違いというものであろう。しかし,それにしても,複合動詞研究が本書のよ

うな形での記述的研究で終わってしまったのではやはり物足りない気がする。というのは，本書を貫くテーマは一体何なのか，という点がなかなか読み手に伝わってこないからである。著者の複合動詞を分析する際の独自性はどこにあり，結局著者は本書を通して複合動詞のどういう側面を明らかにしたかったのか，という点が筆者には最後まで分からなかった。そういえば，本書全体の目的に関する明確な言説が本書のどこにも見当たらないというのも妙である。2.で指摘した比較的理論性の強い部分に関する問題点というのも，突き詰めればそういった本書の性格から来るのではないかと疑われる。筆者が最初に理論的研究と記述的研究の二分法に必ずしも賛成するものではないと述べたのは，両者を分ける軸とは別に，分析者の独自の視点，主張といったものが何かしら感ぜられる研究というものの存在を想定しての話であったのだが，本書からは残念ながらそういった点は見えて来ない。

本書のそういった在り方には，あるいは，本書がどこまでも日本語教育の立場に立って書かれたものである，という点が影響しているのかもしれない。著者が類義形式の相違に気を配るのも，随所で佐治圭三『外国人が間違えやすい日本語の表現の研究』(ひつじ書房，1993年)の外国人留学生による誤用例を引用するのも，そういった本書の性格と無縁ではあるまい。言ってみれば，本書は現代日本語における基本的な複合動詞の意味用法辞典なのである。もちろんそのことが本書の価値をいささかも減ずるものでないことは強調しておかなければならないし，考えようによっては，そういった本書の在り方は本書の筆者が意識的に選び取ったものであり，それこそが本書の独自の立場なのだ，と言えるのかもしれない。下手な理論的研究よりも優れた記述的研究の方が長く残るものであるという言語研究の経験則は，間違いなく本書にも当てはまるものであると言えよう。

(1999年2月25日発行　ひつじ書房刊　A5判　292ページ　本体価格6000円)

——東北大学教授——

(2000年3月13日　受理)